

豊かに生きるための意思決定支援

座長：小林 京子，米倉 佑貴

本シンポジウムは「豊かに生きるための意思決定支援」と題し、治療やケア、その他生活上の重要な事項について、十分な情報をもとに納得して決定することを支援する取り組みである「意思決定支援」の実践や意思決定に関するニーズ、課題の現状について理解を深めることを目的に開催された。

シンポジウムではさまざまな領域で意思決定支援に携わる3人の演者からこれまでの実践や研究、そのなかで見いだされた課題が報告された。

1人目の登壇者の御手洗幸子氏（NTT 東日本関東病院・遺伝看護専門看護師）からは、「遺伝看護の支援」として、出生前検査の意思決定ガイドによる意思決定支援の取り組みや、がんゲノム医療における意思決定の特徴、意思決定支援や患者支援の課題について発表された。

2人目の登壇者の落合亮太氏（横浜市立大学がん・先端成人看護学・准教授）からは、「移行支援」として、小児期発症疾患の患者の小児期から成人期への移行支援の現状、小児期から成人期への移行にあたり、学業や就労など人生・生活において意思決定が必要な場面があること、そうした課題に対処し、自立して生活するための支援の重要性について報告された。

3人目の登壇者である高橋美賀子氏（聖路加国際病院・がん看護専門看護師）からは「がん看護の支援」として、2つの事例が紹介された。これらの事例を通して患者の価値観を明確にすることが重要である一方で、その前提となる情報の正しい理解を得ることの難しさ、ケアに対する希望や価値観を話し合うことが不安や葛藤により難しくなることなどの課題が提示された。

シンポジストの報告後のディスカッションでは、意思決定支援を行ううえでの患者との関係性の構築の重要性や多職種で連携して支援をしていくなかで、看護師が中心的な役割を果たす必要があることなど、活発な議論が行われた。

治療やケアの選択肢やそれに関する情報へのアクセスは向上したものの、そうした情報をもとに納得のいく意思決定をすることは多くの人が苦手とすることである。特に保健医療に関する情報は専門的かつ不確実性が高いため、情報をもとに合理的な意思決定を行うことは極めて難しく、本シンポジウムで報告されたようにさまざまな課題がある。その一方で、そうした課題に対処するための実践の報告や研究も増加してきており、今後ますます発展することが期待される。